
エキセントリックブルース

黒糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキセントリックブルース

【Zコード】

Z0535D

【作者名】

黒糖

【あらすじ】

ナルシストな努力型優等生リンディロッドは、クラスの奇人天才型リディックが気に食わない。こいつをどうにかして学校から追放しようとすると…

(前書き)

はじめまして、この度こちらに初投稿となります、黒糖です。
未熟な文章な上になるべく気をつけて書いたつもりですが所々おか
しな文になつてたりしたと思います。

それでもこれを読むのに読者様に割いていただいたお時間が無駄にな
つていなことを願います。

異世界物ということで付加しておきますが舞台は1960年代アメ
リカ（サンフランシスコとか）のイメージです。

それでは、Hキセントリックブルースをお楽しみください

こちらカラヴァーニア共和国。特産品は無茶苦茶甘いフルーツと今では本当の作り方をしてない、アルコールに添加物たっぷりのお酒。砂漠に3方向から囲まれた国土はそれなりに広く、海に面する西海岸はわざわざ遠くからいらつしやる観光客に人気である。

さすがは新し物好きのカラヴァーニア人、人々は新たに覚えた交通手段をフルに使い始めていた。おかげで市道は毎朝渋滞、公害なんて見ないフリ、臭いものにはフタ状態。

そんな都会に不便さを感じない人々がいた。金持ちだ。貴族と呼ばれる彼らはお得意の経済手腕で広い高速道路をこさえ、びゅんびゅん飛ばしている。

一般人も使ってはいけないことはないのだが、高い使用料金を払わされるとなっては馬鹿馬鹿しくて誰も使おうとは思わなかつた。そんな中、新たに登場したのは”飛行機”という人間の不可能を可能にしたスーパーかつこいい乗り物だ。

どこかの誰かが名づけたフライインという名称で金持ちに親しまれるそれは、貴族間でのステータスのひとつになつたり、軍事力を強化したり

そして本来の目的である人間様と貨物の運搬に大いに役立つことになつた。

そんなこんなで今までは船でしか来られなかつたカラヴァーニアが他国の人々にとつて近いものとなり、より多くの観光客を呼び込めるようになつた。

この話は、そんなカラヴァーニアの首都アルニーレイズで起こつたちょっととしたニュースになつた出来事だ。

平均気温30度、アルニーレイズの夏は暑い。しかし、そんな炎天下の中でも汗ひとつかない連中がいる。

やはり、金持ちだ。これまた新たに開発された空調設備をフル活用して夏を過ごすことを覚えてしまったので、南国の空気に当たる場所といえば車から建物までの移動くらいしかない。

田舎のほうでは、いまだに切り倒したままの木材を机にした学校があるというのに、アルミニフレイズの国立中等学校では全館冷房完備といつリゾートホテルさながらの環境であった。

しかし、環境のよさと人間関係は比例するわけでもなく、涼しい校内では涼しい人間関係が構築されていた。

「ですから、このような制服の改造は校則違反にあたります。寧ろ、それは制服じゃありません」

「うつせーな、寒いんだよ。あっちいってな」

「寒いのなら冷房を弱めます。ですから、その服は脱いでください」「制服なんて持ってきてねえよ」

「ちょ、ちょっとお！」

ジャングルから来たかのような全體が茶色っぽいピアスだけの不良生徒は、制服を取りに帰るといつ口塞をつけたあと仲間の車に乗り込んでしまった。

「あの穴だらけ、ゴリラ　　全部の穴にサフランを詰めてやりたい」
その光景を見て悪態をつく青年は、風紀委員長といつ面倒ごとをしょいこんでいる優等生である。

学年成績はつねにトップ。人にやさしく、ボランティア活動もよくしているらしい。この国では珍しい金色に輝く髪と唐辛子のような赤い瞳を持ち、そしてなんといっても男子、女子、先生、共に溜息モノの美貌が入学当初から群を抜いて目立っていた。

豚のように長いまつげは丹精な顔を更に女の子のように見せ、女じやないのか、本当に男なのかと話題を生んだほどである。

今は、その美しい顔は大きく歪み、廊下にはびこる違反生徒一人一人を睨みつけた。

「まったく、不細工は何やっても氣味が悪いだけだってのに、どうして目立とうとするのかな」

リンディロッド＝ベゼリル、極度なナルシストといつといふを除けばなかなか優秀な学生である。

この学校には一日一回、午前10時ごろに盛大なイベントがある。
「きたぞ！」 「きたつてさ……」 「いらっしゃったのね！」
玄関ホールで沸き立つ生徒。小さな興奮がホール内の温度を約0.4度上げている。玄関ホール先、校舎前に一台の真っ黒い車が止まつた。

車からするりと出てきたその生徒はこの国の防衛大臣を模したきぐるみを着ていた。じりじりと照りつける太陽の下、しつかりとし足取りで玄関へと向かってくる。

「防衛大臣のバラッカスだ！」 「まさか防衛大臣でくるとはおもわなかつたな」 「にてるなあ、バラッカス」

穏やかにヒートアップする生徒達を尻目に、防衛大臣きぐるみの青年は器用に上履きを履き替えていく。そこへ三白眼でにらみを利かせたリンディロッドが近づいてきた。

「毎日毎日飽きない人ですね、馬鹿ですか」

「・・・・・」

「馬鹿ですよね。馬鹿しかこんなことしないし。そのきぐるみ自分で作ってるんですか？馬鹿ですねえ」

「裁縫得意ですから」

「裁縫ですか、いい特技ですねえ。こんな馬鹿なことしてないでボクが着ても問題がないような美しい服を作ってくださいよ」
きぐるみ・バラッカスもとい中の生徒はリンディロッドに一警すると自分の教室、3×3へと向かっていった。たくさんの生徒にかこまれながら。

「リディック＝ジョイド・・・あのド変態め」

次の時間のチャイムが鳴る。リンディロッドは踵を返して教室へと向かう。そのド変態が待つ3×3へと。

リンディロッドとリディック。リンディロッドが1番をとればリディックが2番をとる存在。

リンディロッドがテストで100点をとれば、リディックは99点をかならず取る。リンディロッドがマラソンでテープを切れば、リディックはその直後にやつてくる。

絶対に追い越されないのだから問題ないかと思えば、リンディロッドにとってはとても腹の虫が納まらないものであった。

それは彼の態度にあつた。リンディロッドは優等生、授業態度も完璧。たとえ、頭の中は自分の事でいっぱいでもきちんと起きてペンを走らせていく。

しかし、リディックはというとおかまいなしに寝ている。おかげで総合成績はあまりよろしくないのだが。

他にも彼を苛立たせる要因はあつた。学校の校則超違反者でありながら、やたら生徒に人気があるところだ。

毎朝のきぐるみパフォーマンスに加え、授業中に謎の寝言、購買に並ぶのが滅茶苦茶早いなど幼稚なものが好きな小学生のよつな男子に特に人気が高かった。

それに引き換えリンディロッドはというと、不良生徒からは煙たがられ、一般生徒からは近寄りがたい存在であり、近寄つてくる人間といえば容姿に惹きつけられた虫みたいに愚かな連中である。

彼はそれが許せなかつた。自分のほうが素晴らしい人間なのに（容姿だつて100倍は勝つてる！）どうしてあいつのほうが一般人に人気があるのか。

リンディロッドの中では、入学してから三年間そのことしか頭になかつた。

午後のチャイムが響く。生徒達は思い思いの場所で、仲のいい友達と昼食をとる。

いつものようにすばやい動きで、大人気のカラヴァニア原産フルーツ”メモコット”がたつぱり入ったフルーツサンドを買ってきました

リディックはきぐるみを頭だけ脱いでそれを食べている。

リンディロッドにとつて今日は特別な日だった。一人でサンドイッチにかぶりつくりディックに近づいて、あいていた彼の前の席に腰掛ける。

「食事中に悪いですけど、いいですか」

「ダメでふ」

「きたなつーなんか飛んできたしーしゃべんな馬鹿ッ！…」

「…・・・・・」

またもくもくと食べ始めるリディックにリンディロッドはつづきりしてきました。

彼はいつもほとんどきぐるみを着ているので（毎日違うものだが）素顔を知る人間はあまりいない。きぐるみのおかげか肌は白く、いつも寝ぼけた顔をしている。

生徒の目の中にも気にいらないものがあった。彼の髪の色、リンディロッドと同じ、太陽にきらめく金色の髪。さりげなく顔立ちがいいのも、澄んだ青空の色をした目も気に入らなかった。

「・・それじゃあ、放課後に裏門に来てください。特別指導をします。来なかつたら・・わかつてますね？」

「ふえーい」

本当にわかつてゐるのかコイツ？素直すぎやしないか？

「それじゃあ、食事中にすいませんでしたね。失礼」

特別指導 指導なんてするはずがない。こういつ馬鹿は何いつてもわからないから、身包み剥いで貧民街にぶちこんでしまえばいいんだ。

物事を揉み消す金ぐらいいくらもある。それに、悪は一度懲らしめないと更正しないわけだし。

そんなことを考えながら、自分で買ったメモコット入りフルーツサンドをほおばるリンディロッドだった。

午後の授業をなんなく終え、放課後がやつてきた。

三年間のたまりにたまつた恨みをよじやく片付けるチャンスがやつてきたのだ。

この計画を考えたのはつい昨日の晩。魚のフライの小骨が刺さつて無性に腹が立つていたときに思いついた。

うちの運転手には連絡してあるから、もうじきトラックを運転してきてくれる。着ぐるみのノロマなリティックのことだ、二人でかかれ今朝用意した木箱にすんなりといれることができるだろう。そうすればもうこっちのものだ、かる一ぐら時間ほど運転して国境近くの貧民街に捨てればいい。貧乏人とうまくコモコニケーションをとらないと、砂漠の砂になつてしまつて帰つてこられなくなるつもんさ！

日光の照りつける学校の裏門には生徒も教職員の姿もなく、近くにある花壇には陽気な色の花たちが誰がみるわけでもないのに美しく咲き誇つている。

リンティロッドがやつてきてまもなく、本当にリティックは来た。しかし、先ほどまで着ていたきぐるみ姿ではなく、きちんとした制服姿で。リンティロッドが何事かと問い合わせると

「指導ぐらい真面目にうけないと」

と、いつもと変わらぬゆるい顔で返答をした。

リンティロッドは焦つた。計画がバレているのか、それとも本当に指導をうける気があるのか？ だとしたら、そんなことをしたら可哀想かもしれない。自分は優しい人間だ、更正の余地のある人間にこんなことをしたら自分は優しい人間ではなくなつてしまつ！

「指導なら教室借りたらどうですか？ 汗だくですよ」

けれど、そうしたらまた自分が可哀想だ。こいつのせいにどれだけ自分が辛かった？ 髪の毛だつてずいぶん抜けたし（そりやもう、毎日10本は抜けたよ！）食事だつて甘いものしか喉を通らなくなつた。物を噛むのだつて面倒になつた。おかげで虫歯が増えた。

「・・・・・・・・」

ああ、ボクはなんて可哀想なんだ・・・美しい人に苦労は似合わな

い。苦労なんて全部不細工がしょいこめばいいんだ。そうだ、たとえばこいつとか！！

そんなことをリンディロッドが考へている間に、裏門の近くに褪せた赤色のワゴンカーがエンジンをかけたまま停車した。

「・・・風紀委員長、後ろの人、知り合いでですか？」

「グッドタイミング！こいつだ、計画通りに ッ！！」

振り返ると、簡単に言えば、何人かの覆面をつけた人間がいた。そして辺りに”ゴツッ”と鈍い音が響いた。

リディックのほうに振り向くと白目を剥いて倒れてるそいつがいた。もう一度振り返る前に、リンディロッドも憎き相手と同じ状態になつた。覆面男の手には使い古したフライパンが握られていた。

「・・・鼻が曲がる、くつせえ・・・」

「おれのところのほうが臭いです」

「黙つてろ能無し」

「 委員長」

「なに」

「隣のやつがフンしたみたいなんだけど」

「くさい！やだ、こんなところ嫌だ～！早く出せ～！！！」

大型犬用に作られた頑丈な金網は縛られた両手で叩いても叩いてもまったく壊れる気配はない。

部屋中に響くキヤンキヤン音の耳障りな鳴き声は疲れをしらないようで、リンディロッドたちが騒ぐたびに合唱を始める。

「なんだつてこんなところ・・・」

一時間ほど前のことだった。リンディロッドは大きな爆音と地響きがして驚いて目を見ました。

上下へと不規則に浮き上がる感覚、その揺れはフラインのそれだつた。そして聞こえてくるキヤンキヤン音の声と低く吼える声。どう

やら犬がたくさんいるらしい。

どうしたものかと起き上がるすると両手は後ろでしつかりと縛られており、殴られた痛みをぶり返す重い頭を持ち上げると低い天井にぶち当たつたようで、立ち上がることはできないようだ。寝転ぶこともできないサイズなのでだんごムシのように丸くなつて入れられていた。

暗い室内に目がなれたところで比較的明るいほうを見ると細い鉄格子があつてこのせまい空間からは出られなくなつていて。

そこに顔を押し付けて外を見ると1メートルほど先に犬の運搬用のキャリーケースが所狭しと縦に横に積まれていて、その中に何匹か犬がいるようだ。

左手にはかすかに扉が見えるが、閉まつていて。

上昇中、一度大きく揺れたが、そのときに

「イタツ」

隣のゲージからゴシンという音と共にリーディックが起きたことが確認できた。

「疲れたよ・・もうやだ、家に帰りたい。シャワー浴びたい。こんなところじゃ肌が荒れちゃうよ・・」

「・・・・・」

ゲージ内で大人しく座り込んだリンディロッドだが、どうにも息が詰まつて仕方ない。

闖入者によつて彼の計画は失敗したわけであるが（おそらくではあるが）誘拐なんて未だに信じられないし、これからどうなるのかもわからない。痛いのも辛いのも嫌だし、早く家に帰りたい。犯人も無茶苦茶腹が立つし、早く開放されて犯人達を裁判にかけてやりたい。被害者なんて、素敵じゃないか。美しい自分にぴったり、絵になるとはこのことだ。

そんなことをめぐらせているリンディロッドに対して、ゲージの薄い壁を挟んだ左側にいるリティックはどちらかといえば退屈で仕方

なかつた。

どうも自分の左側にも犬がいるらしく先ほどから寝息と混じつて鼻を鳴らしていてこれが結構うるさくてお得意の居眠りすらできない。淡い光の漏れる鉄格子の向こうを体をよじって覗き込むと、ようやく大人しくなつた犬達がそれぞのゲージですやすやと眠つていた。ここからだと2匹のマルチーズと1匹のポメラニアン、それに大きな体つきのダルメシアンが確認できる。

「委員長ー」

「うるさいボンクラ。お前なんかとしゃべる気分じゃないの〜」

「もしかすると、誘拐じやないかもしません」

「どういうこと?」

「誘拐ということは、金銭目当てもしくは一人の両親の権力の利用を狙つたものですよね。他にもありますかこの場合はないと思ったので省きます」

「そうだつたら最低」

「だとすれば当然犯人は貧乏で権力のない人間つてことです。けれどわざわざフライングをつかつての移動だ。荷物検査はおれ達の前に犬でも入れておいて誤魔化したんでしょうね。これだけ犬を持ってきてるんだ、検査も適当になる」

「でも積み込みの時どう考へてもばれるんじゃないの?これだけ重いと怪しまれるどころじゃないはずだ」

「積み込む人間に金でも掏ませたんですよ。それにフェイクにしてはやたら高そうな犬ばかりだ、手入れもきちんとしてあるみたいだし」

得意げに(リングディロッドはそう感じた)自分の考へを言つリ「ディックにリングディロッドは先ほどから腹が立つていた。このやうう、頭がいいフリなんかしやがつて。能ある鷹は爪を隠すつてよく言つだろ。

「ちょっとああ

「はい、委員長」

「今日はよくしゃべるねえ、どうしたのぞ。っていうか、そんなのわざわざから判つてたことだし、今更言わなくてもいいよ。超想定内」

「すじません」

「やつぱりこいつは氣にくわない。自己主張が激しそぎる。ブサイクで頭が悪いくせに、どうしてそう目立とうとするんだ？素直に引き下がるものポイント稼ぎなんだろ！」

「結局は、犯人が金持ちって事だろ。ボクか君の家に恨みのあるやつがやつてるんだよ。それか、ボクの美貌目当てか・・・」「委員長つておもしろいですね」

「冗談だと思つてリディックは笑つた。

「お前だけ死ねよ」

「冗談抜きでリンディロッドはそう思つた。

「けど、そうとは限らないと思つんです。おれと委員長が外にいたのはたまたまだし、身元調べるために生徒手帳もとられたみたいだあ、ほんとだ生徒手帳が・・なんでコイツはそんな事気にしてられるんだ？他に考えることがないのか？？

「想定内。ほんと、黙つてくれない？もう寝たい

「すいません」

2時間ほど経つただろうか、フラインはまだ上空を飛び続けていた。リンディロッドがこんな状況であるにも係わらずぐっすりと眠つているすぐ隣のゲージで、リディックは眠れないのでいた。

この犬だらけの貨物室はとてもよく空調が働いており（逆の、空調があまり働いていないからかもしだれないが）とても涼しい。

「寒い」

豪農のジエイド家は比較的田舎のほうの高台にあるので、密集した都会とは違い、クーラーなどなくとも何とかなつたし、父親はクーラーを一台もつけることを許さなかつた。昔から、目立つ風貌を持ちながも人付き合ひが苦手でその上非常に変わつていて彼は、裁

縫の趣味も手伝つて着ぐるみを着るようにして、いたから実際クーラーの風に生身で当たることなんてほとんどなかつた。

だからクーラーに慣れてしまつて、リンディロッドには平氣でも、この温度はリーディックにはとても低く感じられた。

イモムシのように這いすつてゲージの奥の壁にぴたりとくつついて丸まつて暖かくなるのを待つことにする。

ぼうつとしているドアの向こうから小さい話し声が聞こえてきた。それは2人ほどの男が会話しているようだ、自分達、"金持ち"とはすこし違うしゃべり方だつた。

「この調子でいけばと3時間つてところだな」

色黒い40代後半の男は年齢より老けて見えるがさがさの手で煙草に火をつけ、煙を吐き出す。

「しかし、こんなでホントに上手くいくんですかね？」

煙の向こう、短髪の若い男はきつちりと閉まつた搭乗口についている小さな窓を覗き込んだ。外は既に夜の世界で、遙か下界に建物をみるこことはできず、ただどこまでも荒涼と続く砂の山がこの砂漠の景色に味気を与えてくれている。

二人とも作業服によく似た濃いブルーのジャケットに上と合わせたカーハパンツ、それに使い古しのブーツというなかなか動きやすいそうな服装。それに政府認定の"運び屋"のバッジを胸につけている。

「さあな。でもやってみるしかあるまい」

「オレは副業のほうで金さえ貰えればいいんすけどね」

「ペイズリル、また博打か？」

「似たよつのモノつすね。それよりベイシュさん」

「ああ」

「ここは禁煙つすよ」

慌てて煙草を踏み消すベイシュにペイズリルは苦笑した。煙草の吸殻は磨き上げられた床に汚らしく残つた。

搭乗口の狭い廊下と客席は壁で隔てられており、左右の搭乗口を結

ぶ狭い廊下は外界の濃紺で染め上げられている。

客席と繋がる扉がゆっくりと開くと穏やかな明かりに背を向けた一人の女性が立っていた。20過ぎの若くてきりりとした顔立ちに、黒く長い髪。結い上げられたそれが白い肌と見事なコントラストだ。ベイシユ達と同じような服装ではあるが女性向きのつくりだからかすっきりとした印象を与える。

「リーダー、見張りの交代です。ここは任せて仮眠をとってください」

「いや、わたしはまだ大丈夫だ。もう少しここにさせてくれ」

「駄目です。明日もあるんですから、今日はもう寝てください」

「そうですよ、明日は大事な日なんですから」

「・・・そうだな。ここはレイチエに任せて先に一休みさせてもらおうか

「任せてください」

「オレもしばらぐ」「ここにいるつす」

「一人で充分ですから、寝てください」

レイチエはとても淡々と言い放った。

「ちえつ、折角うるさい父親抜きで話ができるかと思つたのに・・・

「何か言つたかペイズリル?」

「早く寝ないと夜あけちまいますよベイシユさん!・・・」

客室にそろりと入つていく一人を見送つたあと、レイチエは静かにドアにもたれかかった。

「大丈夫、きっとうまくいくはず」

薄つすらと明るさを増していく空の中、孤独な機体は砂漠を越えていく。

純に白く光る朝日が顔を出し切つたころ、その射光を浴びながらフライング砂漠の町へとゆっくりと着陸した。

「お疲れ様でした」

「また運転お願いするかもしれないわ。やつぱりあなたのところが

一番サービスがいいんですもの。運び屋さんて粗雑な人が多いでしょ」「う

「恐縮です。こいつらがしゃいませ」

「ええ、帰りのフライトでね」

お客様を無事にフライングから降ろせた。これからが本番だ。

「ペイズリル！」

「あいよあいよ」

彼の手には一着の青い運び屋の制服と”見習い”と大きく書かれた名札があった。

「うん。名札も良い出来です。リーダーは忙しいから」さうはこちらでやりましょう」「

「そつすね！」

レイチエは足取り軽く貨物室へ向かおつとするペイズリルから制服をひつたくる。

「あなたがいたんじゃ余計に面倒なことになります。あなたは座席の掃除」

「冷たいっすね・・・」

レイチエがドアを開くと暗い貨物室に光が注ぎ込まれる。左手にある電気のスイッチをつけると人間の不愉快そうな唸り声が聞こえた。「随分とよく寝てるみたいね。起こしてごめんなさい」

犬たちからの餌を期待するまなざしを尻田に一人の許へ行く。どうやら起きていたのはうるさい方だけなようだ。

「寝ないとオバサンみたいに肌のコンディション最悪になるからね」這い出してきたうるさいほうが足元からじろじろと睨んでくる。

「あら、そう。洗顔もしてない人に言われたくないわ」

「誰のせいだと思つてんだよ！？」

「あなた、立場をわきまえるつてことができないの？」

ほんと、金持ちつてどうしようもない連中ね。そう思いながらレイチエは小さな鍵を取り出してゲージの錠を外した。

目を丸くするリンディロッドにレイチエはこう付け足した。

「逃がすわけじゃないわよ、早く出てきなさい」

「だったら、どうこうつもり？・・ボクたちは荷物つてことになつていいんだろ？」「ひう

リンティロッドが恐る恐るゲージから這い出すとレイチエは女性にしては力強い腕で細い彼の体を引っ張り起こした。

「残念だけれど、こちらには知り合いがいません。それに、この国は出るときより入るときのほうが煩いですから

そう言いながら両手を縛つてある縄をほどくと脇にあつた青い制服を彼に手渡した。

「10分以内にこの服に着替えてください。右胸にこの名札をつけて、今着ている服はこちらに渡しなさい。そちらの青年もちゃんと起こして同じようにさせなさい。」

レイチエはリティックのゲージの鍵を開けるともう一着の服を置いて部屋を出ていってしまった。リンティロッドはぶつぶつ呟こながらリティックの眠つているゲージを思いつきり蹴つた。

「朝だーっ、起きるー！..能無し起きろッ！..」

何回か蹴つたところでリティックがようよろしくながら這い出てきた。寝不足で酷く無様な様子をリンティロッドはひとしきり笑つたあと乱暴に紐を解いてやつた。

「それにしても、何をあの女！コスプレが趣味だつての？カワイイボクと同じ衣装を着たら惨めにならつてわからないのかなア」

狭苦しい場所で凝り固まつた体をほぐしつつリンティロッドは渡された服を見た。

「フラインの添乗員のスーツか。こんなダサいの着たくないんだけどなあ」

「おおお

リティックはどういうわけか渡された名札を見て目を輝かせている。

「ナニこれ。あいつらこんな物まで偽造したつてわけ・・

その名札は顔写真、名前、所属している運び屋の名前が記された、本物にしか見えない偽物の添乗員名札であった。

名前は偽名を使わっていたが、顔写真は生徒手帳から抜き取ったものを加工してあるのでほぼ完璧な運び屋の名札だ。

「ボイストン＝ゴンザレッセイ・・なんて重そうな名前なんだ。華麗なボクに合わなさ過ぎる！能無しのは・・ショーリー＝サイフォ・

・風速1mで吹っ飛んでいきそつじやん」

横からからかわれているのにも関わらずリーディックはそのネームプレーを見ながら、まるでおやつがたくさんあるテーブルを見た少年のように目を輝かせていた。

「アーク運送・・フライン乗務員見習い・・
「ダメだ、こいつ」

着替えが済んで部屋で待つているとしばらくしてレイチエが入ってきた。

「これからあなた方には添乗員見習いとして空港に降りてもらいます。ばれるでしょうから先に言つておきますが、ここはショーダッサです」

「ショーダッサ？」

リンディロッドは地理に非常に弱かつた。

「アルミニレイズの東側に位置するゾイ砂漠を越えた街です

「南回り？」

リディックが拳手して尋ねる。

「はい」

リディックが自分にわからないことを口走るのは非常に腹が立つものだつたが、リンディロッドは疲れていたので大人しくしていた。

「我々はあなた方が大人しくなさつていれば何も危害は加えないつもりです。昨日はあのような形になりましたが今夜からはホテルをとつてありますし、そこで宿泊してもらいます。目的はまだ言えませんが・・悪いようにはしません。ですから空港を出る際は自然に振舞つていただきたいのです」

「・・それってさあ、ただ単に空港を無事に出たいだけの言い分じ

やないの？出た途端また犬の力口にぶち込むんだろ」

「信用していただけないのは承知の上です。でも、わたし達を信じてほしい」

「誘拐犯を信用しろっての？ばっかじやない！何を言に出すかと思えば・・それにねえ、犬んとこぶちこまれたのもあるけど、それ以前に殴られた恨みだつてあるんだから・・・」

リンディロッドが突きつけた指と交差するように突き進む銃弾は貨物室の壁に小さな穴を開けた。鋭く睨むレイチエは微笑んでこつと言つた。

「ならば、仕方ありません。あなた方にはここで死んでいただきます。わたし達はあなた方の死体をばれずに対処することもできる」

「さつ・・・最初つから協力するつもりでしたよーんだ！安心してください、ボクたちは何でも言つことがありますからっ！」

先ほどの銃声に驚いたペイズリルが簞に雑巾をたずさえたまま貨物室に勢いよく飛び込んでくる。

「アーッ！レイチエさん撃つちゃダメつていつたじやないっすか！貫通したらどーするんすか！！」

慌てまくるペイズリルを尻目に、彼女は続ける。

「いいですか、ここから外に出たとき少しでもおかしな動きをしてみなさい。目撃者もろとも射殺します」

レイチエに吼える犬の声がこだます室内はそれほど暑くもない。しかし、リンディロッドとリーディックには額に汗が浮かんでいた。乾いた喉で唾を飲む。

（この女、目が本気だ・・・）

「では我々は先に降ります。あなた方はわたし達についてきてください。あなた方は常に見張られていることを忘れないで。ペイズリル、あなたもついてきなさい。荷物はリーダー達に任せましょ」

「これいーんすか！？ばれたらやばいっすよ…」

「帰りの便までにじうにかしといてください。さあ、行きましょ」

彼女はなめされた皮の大きい鞄を軽々と担ぎ上げると入り口近くのペイズリルを押しのけて搭乗口から降りていった。それに続く3人。機体から地面へ続く階段がやたら長く感じられる。

どう見ても、この犯人達は若い。ということは首謀者はまだ別にいるのだろう。どれぐらいの規模で行われている誘拐なのかもわからない。わかつたことは、犯人は自分たちに自らの正体を知られても構わないということ。

熱された空気が蜃氣楼を作り出し、滑走路の先に続く砂の大地を歪ませている。まだ日が昇つたばかりだというのに鋭い日差しが人々の肌を焼く。

手荷物検査などを簡単に済ませると広い待合室に出た。そこは早朝だからか、人はほとんどおらずガランとしている。ちらほら見かける現地の人間は鮮やかな布を頭から被り、そこから覗く濃い褐色の肌は自分たちのものとは全くちがつた。

居心地が悪いのはこの建物に空調設備が無いからでも誘拐犯に脅されながら歩いてるからでもなく、その黒い顔に宿るのが自分たちを呪うかのような表情だつたからだ。

空港を抜けると黄色いタクシーが長い列を作っているところへ出た。空港の壁沿いには貧しい子供が細い足を抱いて大きな黒い目で見つめている。何人かはカタコトで荷物を持つと集まってきたが、それ以外の子供はぼろきれに包まつてうつろな目をこちらに向いているだけだつた。

ペイズリルがその子供たちを押しのけてタクシーの列のすいぶん後ろに停めてある黒いバンへと走る。運転席には一本の足がにゅつと飛び出しており、ペイズリルのしゃがれ気味の声に反応して足を引っ込めた。

運転手は体勢を整えると車のキーを回してエンジンをかけ、砂利道にタイヤをがたがた言わせながらレイチエの許へとやつてきた。

「時間キッカリ、うまくいったみてえだな」

ミラータイプのサングラスをついたその男の肌は褐色で、タンクト

ツプから伸びた逞しい腕にはカラヴァーニアの伝統的な刺青が施してある。短く刈られた黒い髪は日に焼けててっぺんが茶色くなっている。

「ええ。父さん達はもうすぐ来る。車、停めといてくれた?」

レイチェは車の助手席に乗り込むとシートベルトをしめる。彼女の言葉はアルミニレイズでは使われていないもので、いわゆる小学生が博物館でもらうプリントに書かれていたような“原住民語”だった。

もちろんそんな言葉がリンディロッド達に理解できるはずもなく、正体不明のこの連中から逃げる希望をさらに失つただけでしかない。

「さー乗った乗った! あんま外いると日射病になるつすよ!」

二人の背中を陽気に押すペイズリル。しぶしぶ乗り込むと車内は窓が開け放しだったにもかかわらずものすごい暑さだ。

「のわつつ! 熱すぎるよ! クーラーつけろバカッ!」

「ソンの坊主、この車にクーラーなんてついてないぜ」

運転席の男は後ろをむいて馬鹿にしたようにリンディロッドに言った。

「クーラーがついてない車なんてあるわけないだろおーつ!」

「こつちじや付いてるほうが珍しいんすよ」

「この気違い! !

車はゆっくりと動き出す。先には道路などは敷かれておらず小石の混じる砂の地面を車体を躍らせながらゴロゴロ進む。リディックはドアに寄りかかって開いてある窓から外を見ていた。リンディロッドはぶつくさと不満を漏らしていたが、リディックにとつてはちょっとぴり楽しい冒険だった。

乾いた砂が風に巻き上がり、青く広い空がどこまでも続く。近くのサボテンは上に上に伸びて、遠くの街は蜃気楼で歪んで見える。道が悪いので何度も窓枠に頭をぶつけながらもそれを食い入るよう見つめていた。

「能無し、オマエ授業で原住民言語とつてたろ。ソンの坊主つて

体なんて意味なんだ？」

偉そうにふんぞり返つて座るリンディロッドが横からひっそり尋ねてきた。顔を車内に戻してリディックは応える。

「ソンは、こっちで”薄い”って事です。委員長、髪薄いからリンディロッドはグーで思いつきり殴つた。

「ボクはハゲてない！！」

「さつき街でパン買つといたぜ、坊主達も食つか？」

「髪の色が、です」

前の席の男からパンを受け取りながらリディックは続ける。そのパンはトウモロコシを使ったもので、表面がかさかさしている。

「そんな気持ち悪いモン食べるなんて信じられない」

「美味しいですよ、ボイストン君も食べないつすか？毒なんて入つてないっすよ」

「そんな名前じゃない！！」

「私が決めたのに文句でもあるんですか？」

リンディロッドが何か言おうと腹にちからを入れた瞬間、彼の腹の虫は大きくわめいた。

「グー、ですか委員長。実はお気に入りなんですね」

「つるさい！死ね、今すぐみんな死ね！！」

車が走り出してから20分ほど経つたころようやく街についた。街といつても一人の住んでいる車がびゅんびゅん走り回つていて近くに繁華街があつたりビルやホテルが立ち並んでいるようなものは程遠く、あるのはせいぜい1階が店舗になつてている3階建ての小さなマンション。たまに5階建てのビルがある程度で、車では入れない細い横道がたくさんあり、奥にもたくさんの民家があるようだ。街は全体的に乾いており、からうじて舗装してある道路は殆ど車が通つていないので砂がかぶつているし、建物も土レンガに赤や茶系の自然な塗装を施したもののが立ち並んでいる。道幅は広いが街の中心部に行くにつれ賑やかになり、店舗が増えて

いくので道脇が簡単な市のようになつていて車にはつらい道のりだつた。

やはりこの住人は鮮やかな衣装をまとつた濃い肌色を持つ人々。リンディロッドは自分はよそ者なのだと、運転席と助手席の間にあらミラーを覗いて再認識した。

外を眺めていたリディックはその中にひとつ、市から少しほなれたところに大きな建物をみつけた。周りの建物と外観を似せようとしているが溶け込めていない大きなホテルだ。

「あー、ゴールドカイザーホテルだ」

「こんなへんびな所、おつと。こんな所にもあるんだねえ・・・」

車は街中を突つ切つたところ、「ゴールドカイザーホテルが目の前に迫る場所で停車した。この辺りはあまり人通りはなく雑然としており、脇に何軒かお土産屋があつたり、小さなホテルがあるくらいである。

リンディロッドはリディックを押しのけて窓から顔を突き出した。

「もしかして、とつてあるホテルつてのは・・・！」

膨らむ期待に車から飛び出しそうなリンディロッドにレイチエは「このホテルです」

ゴールドカイザーホテルの反対方向にある、規模は50分の1程度の正真正銘土レンガ造りの小さな建物を指差した。

「ちきじょー！田の前にゴールドカイザーがあるつてのに、なーんでこんな汚いホテルにとまんなきやなんないんだよーーー！」

「それは、もちろん、おれ達は誘拐されている身だからですーーー！」

「るさいーーー！黙れえつーーー！」

涼しい窓際で椅子に座つているリディックにリンディロッドはカラを投げつけた。

「しかも何でコイツと同じ部屋・・・」

「それは、もちろん、おれ達が誘拐ツーーー！」

リディックが言い切る前に、リンディロッドはペプシを投げつけた。

「一人に与えられた部屋というのは「ゴールドカイザー ホテルの目の前にある安ホテルの一室だった。

かなり古いらしく、壁にはひびが入っていたりベッドのスプリングは壊れたりで、拳句の果てに安い芳香剤から悪臭が漂っていた。（これは先ほどリングディロッドが窓から投げ捨てた）

部屋の前には犯人一向が交代で見張りをしているので出かけることはもちろんできない。何時間かあとに呼び出されるはずだが、二人とも話をよくきいてなかつたのでわからない。

「シャワーにはくもの巣張つてたし、タイルが割れてるし・・・」リングディロッドは先ほどシャワーを浴びた時に虫を踏んづけた事を気にしてスプリングがマトモなほうのベッドの上でずつと足の裏を拭いている。

「へえ、見てませんでした」

リディックはいつもの調子でのんびりしている。

「これだけカイザー ホテルが近かつたら、逃げるの簡単そう」「ビーウー」とだよ

「ほら、ここ3階だし上手く降りればあっちまでひとつ走りで・・・」「そうか！あそこなら言葉だつてバツチリ通じるし、電話もあるはずだ。あのババア、この辺りは電話なんてつながってないわよお～みたいなコト言つてたけど、これはもうボク達の勝ちだ！」

「今脱出しますか？」

ロープに出来そうな布を探すリディック。リングディロッドは考えた末にやりとしてこう言つた。

「一応あのアホ達の誘拐の理由とやらを聞いておいても損は無いからね」

「そうですね、あのアホ達の誘拐の理由は聞いてみたいですね」

「アーハハハハハ」「はははははは

部屋の中から聞こえてくる高笑いにドアの見張りをしていたペイズリルは

「やつぱりあの芳香剤、ヤバかったつかね・・・」

と、呟いた。

夜が来た。ガンガン照りつける太陽は西に沈んで、温度はぐんぐん下がり、ついたときはいらないと思っていた備え付けの分厚い布団でリンティロッドは居眠つていた。

昼食はペイズリルが買つてきたちよつと辛いホットドッグ、おやつは（リンティロッドがよこせと頗るのでペイズリルが買つててくれた）辛くないホットドッグだった。

ソーセージが大嫌いなリティックはパンしか食べてなかつたので、夕食こそはとシーツをかぶつたままドアの前でうろうろしている。扉の向こうから足音が聞こえたかとと思うとあちらからかけてある鍵が開いてレイチエが部屋に入つてきた。レイチエの後ろにいるのは知らない男。リティックはあとじせつて窓際のよく軋む椅子に座つた。

埃っぽい室内、彼らの靴についた砂が床に散らばり、そこを踏みしめるブーツを履いた日に焼けた色黒の足。

椅子を引いて重い腰を下ろすと彼はこう切り出した。

「单刀直入に言おう、君たちをがどわかした理由は我々の仲間を助ける為だ」

ベイシュが吸つていた煙草を灰皿に押し付けて消すと、新しい煙草に火をつける。

煙越しに見えるリティックは動じた様子もなく、穏やかな目でこちらを見つめていた。

「お友達も起こしてくれるかな」
「お友達つてわけじやあないですから」
「・・・ペイズリル、彼を起こしてくれ

ペイズリルが眠つている青年を搖り起こす。寝起きのリンティロッドは非常に機嫌が悪く、空いていた椅子にどっかり座ると下唇を突き出して一言。

「何

「おれ達を誘拐したのは、仲間助けるためだそうです」「へえー、それで」

ペイズリーの淹れてくれた紅茶がテープルに並ぶと、乾いた喉を潤すようにリングディロッドは一気に飲み干した。思ったよりも美味しい。

「リングディロッド、君のお父さんは最高裁判所長官だ」「空のカップを持つ手がピクリとして、青年の顔が微かに翳る」「それが？」

「ところで、1ヶ月ほど前にドシレクリン市内で起こった事件を知つていいか？」

「テロ、ですか？選挙運動中の立候補者を含む十数名が爆発で死亡したつていい？」

「そうだ。主犯とそれでいるのがシヴォ＝ヨクスエン容疑者。殺された男と同じ選挙区で立候補している一人だ」

煙の充満した室内だというのに、レイチエは窓を閉めた。

「彼は、明日の2時からアルニーレイズの最高裁判所で裁かれる」「仲間というのは、そのテロリスト・・・」

不快感を露にしてレイチエはリティックに銃を突きつける

「テロリストなんかではないわ！」

「レイチエ、その癖はどうにかしたほうがいいだろ？銃はそこに置いておきなさい」

「でも、父さん！」

父親の咎めるような目は口以上にものを言つらしく、娘は部屋の隅に銃を置いた。

ベイシュは険しい顔つきの中で異色を放つ潤んだ青い目で一人を見る。

「ああ、彼はテロリストではない。第三者によつて冤罪を被らされよつとしている。明日提出されるのは偽の証拠、それに曖昧な目撃証言。しかし、我々は彼が無実である証拠を持つている」

「その証拠テープはもうヨクスエンさんの弁護士に送つてあるつす。

でも、証拠の数や世論からしてこちらは圧倒的に不利つす

「そこで明日の裁判の判事であるリンティロッドの父親、アーノルド＝ベゼリル氏に協力してもらいたく、君を誘拐した」

組んでいた足を下ろし、リンティロッドは静かに立ち上がる。

「だったらどうしてボクなんだ？ 兄のワイデンもいるし、末のキャライなんて攫うにはもってこいだらう」
「この誘拐は誰も気づかない形で進めておきたいのだ。誘拐犯に脅されて、という形ならば判決を取り消される可能性がある。その点君は父親と一緒に住んでおらず、突然別荘を転々としたりするそうじゃないか」

「じゃー自分はただの巻き添えなんですよね」
リディックは忘れられたころに拳手をする。

「リンティロッド君さらおうとした時丁度君が来たんすよ。申し訳ないっす」

「彼の無実を口で言つても仕方が無い。ここに証拠品のロッパーープがある、新聞の情報と比較して見てもらいたい」

暗い室内で青白く光る小さなオンボロテレビには、爆破された選舉事務所の隣にある宝石店の監視カメラの映像。しばらくすると大きな荷物を持った不審な男が現れた。

辺りを窺いながら事務所に入つていく。数分すると男は出てきたが、先ほど持つていた大きなバッグは見当たらない。

リモコンを使ってビデオは逆再生され、男が出てきたシーンで静止する。

「新聞の情報では、ヨクスエン容疑者は自らの手で爆弾を運び、仕掛けたということになつてゐる。これはその時間帯だけ彼のアリバイがないことから推測された。しかし・・この映像の人物は・・ベイシユは男が事務所に入る寸前のところで映像を止める。

「薄い肌の者だ。ヨクヴェン容疑者は見ての通り・・

リディックは手渡された新聞の彼の写真を見る

「彼は誇り高き太陽の肌の一族だ」

リンディロッドは前を見ていた。映像の、もつと先にある何かを見ていた。テレビのちらつく明かりが彼の白い肌を不気味に照らす。「しかし、これでは彼が第三者に頼んだということにしか繋がらないのでは？」

「そうだ。しかしこれで多少の時間は稼げる。その間に我々はこの人物について調べる。なに、ほかの立候補者を叩けば埃は幾らでも出るだろ？ 太陽の肌の一族を忌む者は多いようだからな」短くなつた煙草を灰皿に押し付けて、ベイシュは少し目を伏せた。新しい煙草を取り出す。

「ヨクスエンさんはオレも一度しか会つたことはないっすけど・・・みんなが平等に幸せに暮らせる事を第一に考えて生きてる人っす。この国歴史の溝を埋めようと頑張つてる人っす！」

「だからこそ、敵も多い。自分達の城を崩されまいと太陽の人を入れようとしない。馬鹿にしているようだけど、本当は違う。恐れてるんです、我々を。出来ることなら貴方達を巻き込むようなやり方はしたくなかった、彼の思想に反する事だから・・それでもこの方法しかなかつた」

「君の父上には悪いが 説得してもらえないだろうか、リンディロッド君」

彼に注がれる視線。何を見ているのかその端麗な横顔からはよく読み取れない。長いまつげに光が散乱している。

リンディロッドはゆっくりと口を開く。

「やーりーまーすーよお。説得しなきゃダメなんじょ。誰だつて、自分が一番可愛いですからね」

ペイズリルはリンディロッドの冷たい手を握つて感激をあらわにした。

「ホントっすか！？」

「もちろん」

「君ならわかつてくれるとは思つていた。ありがとう、リンディロ

ツド

「でも」

安著の溜息が漏れる穏やかな空気が一瞬凍りつく。

「あの人だつて一番自分が可愛いんですから」

AM3時、アルニーレイズ ベゼリル邸[モ
リンデイロッドの父親、アーノルドは自室のふかふかのベッドでい
びきを搔いていた。

広々とした室内は寝室と書斎とに別れており、大きなデスクの上に
は目を通した書類が散乱している。

美しい調度品に美術品の数々・・しかし部屋の主はそれらと比べる
と酷く脂ぎった顔の男だつた。

突然、金で装飾された黒い電話が大きな音を立てて鳴り出した。耳
障りなその音に目を覚ましたアーノルドは悪態をつきながらデスク
に置かれた電話へと向かう。

「何だというのだこんな時間に！」

目やにを搔きだしながら髭の太つた男は唸つた。

「やあ、パパ元気？」

電話の先の息子の声はあまりにも暢気だつた。

「リンデイロッドか！？今何時だと思つておる！また海外に行つて
金がなくなつたのか！！」

リンデイロッドは電話のコードをくるくると指に巻いて遊びながら
寝そべつて電話をしている。しかしそんなのは電話の相手にはわか
りもしない。

「やだーそんなわけないじやん。けよとひあ、誘拐されちゃつたみ
たいで～」

「またそんな遊び覚えおつ・・・・誘拐といったか？」

「安心しなよ、身代金はいらないつて」

電話の先からの溜息。口の守銭奴め。

「・・何が目的だといつのだ？」

「明日の裁判」

口調を心なしか強めるリンディロッド。

「明日の裁判、あるでしょ 2時から。それで、被告人を無実にしてほしい」

「そ、そんなことできるわけないだろ？！私には真実を法廷で見つけるという義務が・・」

「え？ 可愛い未成年を見つける？ 何の話だよ」

「犯罪者の片棒などかつげるわけ

「パパ、何も知らないのはワイデンとキャニイだけだよ。パパは立派な犯罪者だ。人身売買は犯罪じゃなかつたつけ？ ボクの思い違いかな」

「・・・・・」

「ここには電話がある。情報を売るのは簡単だ。どうする？」

長い沈黙。小刻みに揺れる唇はリンディロッド。もちろん、電話先の相手にはわからない。アルミニレイズのコウモリが小さく羽ばたく音。汗ばんだ手から受話器が滑り落ちそうになりながら、父親は言った。

「・・・・・わかつた、明日の裁判、被告人は無実にしよう・・」

こみ上げるのは喜び？ 悲しみ？ 震える唇をかみ締めて、自分にもう少し不甘ばれと言い聞かせる。

「さつすがボクのパパ！ 話がわかる人だね。無実に傾けられるような証拠もちゃんとあるみたいだから安心しなよ」

戻れないあの場所に

「・・じやあ、サヨナラ」

受話器を叩きつけるように戻すと、リンディロッドはそのまま布団に丸くなつた。

「・・うまくいったんすか？」

ペイズリーは心配して彼を覗き込む。顔は布団に押し付けているの

で見えないが、小刻みに震えてるのがわかつた。

「つまくいつたよお～、さつすがボク・・・」

「父さん！」

レイチエは一人が今まで見たことの無い笑顔を見せて、原住民語で父の名を呼んだ。

「ああ、やつた。これで彼は・・・」

感極まる中、リティックはリングティロッドを見た。彼はまだ布団の上で丸くなっている。緊張がとけてほつとしたのかとも思つたけれど、どうも違うように見える。

「委員長、大丈夫ですか？」

長く座つて暖かくなつた椅子から離れると夜の風が頬をなで、そしてリングティロッドのやわらかい髪を揺らす。

彼はがばつと起き上がる。その顔には悲しみや楽しさとは違つ、いわゆる”狂つちゃつた笑顔”でいっぱいだった。

「リティック」

鼻水やら涙やらが顔にべつたりとついた顔。汗で髪の毛が額に張り付いて、それでも口角はつりあがり、目は視点を合わせないまま見開いている。

友人の無事が保障された穏やかな空気にそぐわない、物騒な言葉。その言葉は、憎きクラスメイトにしか聞こえなかつた。

「ダメだ、もう家には帰れない。あの男はボクを殺しにやつてくる！」

翌日、滞りなく裁判は行われた。

約束どおり、シヴォ＝ヨクスエン容疑者は有罪を免れ、判決は持ち越しとなつた。

ベイシユ達は大きな組織の中のひとつであるようで、裁判が終わつた報道を見ている頃にもまた新たな情報がこちらに送られてきた。確実にヨクスエンの無罪が手にとつて見えるようになつてきたが、そんなことはリングティロッドには何の関係もなかつた。

誘拐されてから3日目の朝。

「委員長」

リンディロッドは窓枠に肘をついてその先に広がるゴールドカイザーホテルの異形な建物をぼうつと眺めていた。日差しを受けて白く照り返すその建物は小さな町に忽然と現れた膨張し続けるチーズのようで禍禍しい。リディックは彼に先ほど自分で入れた冷たい紅茶を渡す。

しかし少しこちらを振り返つたかと思うとまたホテルに視線を戻す。受け取らうとしないので、仕方なくテーブルにそれを置いてリディックは椅子に座る。

「ボクはもう学校をやめる。だから委員長なんて呼ぶな
よく眠つたおかげで田やにやらなんやらで田が開きにくい。田をこ
するとカスカスの田やにが風に乗つた。

「どこに行くんですか」

リディックはテーブルのティーパックなどが入つた籠の中に並べてあるガムシロップをひとつ取つて紅茶に入れた。

「さあね・・ホワイトランドに住むママのとこに行く」となるだ
らうな。あんな寒いところ死んじゃうよ」

「あんな北に? もう会えませんね
もう2個、ガムシロップを空ける。

「ラッキー、清々する~」

さらにもう3個、ガムシロップを空ける。とろりとした蜜が紅茶の底にたまつて透明な領域ができた。

「そうですね。リンディロッドさん」

先ほどから計6個のガムシロップを入れた紅茶にストローを挿して渡す。氷がぶつかつて涼しい音を立てる。

「わかつてんじやん」

それを受け取つたリンディロッドはよく混ぜてから美味しそうに飲んだ。

「あいつはボクの命では動かない。ボクはあいつの子じゃないからね」

開放的な大きな窓には細い木をたばねた庇がついており、そこから漏れる光が心地よく、ぼろいながらもよく考えてつくられた室内は風通りがよく涼しい。

窓際の椅子に座る二人は快適な朝を過ごしていた。

「ボクの親はどちらも適当な人間だった。父も母も好き放題して、種違いやら腹違いの兄弟はたくさんいるみたいだ」

紅茶の入った大きなグラスを持つてストローでかき混ぜる。慰めるような甘さ。

「あいつらはもう別れたんだけれど、ボクはこっちに学校があつたからアルミニーレイズに留まつた。馬鹿なあの男も成長するほどに美しくなるボクを見て自分の子供じやないと確信した。ボクは昔から知つてたけどね。 父のやつてることも、5年くらい前から知つてた。同じ家に住んでいて気づかないとことは殆どないさ。もちろん、兄や妹も知つていたけれど、知らないと電話で釘を刺しておいたからあの二人は父にいびられることはないっしょ」

ストローのはしを噛みながらロンディロッドは言つ。

「兄弟想いですね」

「あいつら馬鹿で不細工な上に逃げる場所もないからね」

ゴトリとグラスをテーブルに置くと椅子にもたれる。

「あの男は何より自分が可愛いんだ。ヤツに正義とか子供の命だとかほざいたつて無駄なんだ。自分を賣かす要素をボクが持つていることをいわなくちゃ。未成年の人身売買なんて週刊誌に売られたら降格どころじゃないだろうからね。これはボクがひとり立ちする時の切り札としてとつておいたんだけど使ったものは仕方ないし」

「そして、これから危険要因を野放しにするわけないってことですね」

飲み終わらない紅茶を置いて、リディックは手についたガムシロップをグラスの水滴で拭つた。

「そーゆーこと。絶対殺しに来るよ。誘拐犯は射殺してもかまわないとか言ってさ、そのとき一緒に蜂の巣だろーね」

「おい、坊主ら！もう帰れるつてよ！用足すなら今だぜ」

ノックもなしに入ってきたのは通りのいい太い声をもつサングラスのタンクトップ男。都会のサーフィン野郎でもあれほどの中年は滅多にいない。

「へーい」

「じゃあ伝えたからな！」

白い歯をないと出してこちらに笑いかけるピーナツを開けたまま出て行ってしまった。

「あの人たちもおれ達も助かるには」

心地のよかつた椅子を離れてドアに向かう。荷物も上着もないこの旅行はチェックアウトが簡単でいい。

「そう、僕たちが単独でアル二ニレイズに帰り着くしかない」

男の大きな足音を追つて急な階段を下りていくと狭いロビーに出た。明るい室内には南国の派手な色彩の花がフロアの中央に置かれており、人のよさそうなおばさんがモップでせつせと床を磨いている。来たときも通つた場所だが、けして趣味は悪くない宿だと思えた。軽快なBGMが心地よい。

ベイシユ達と知らない二人が話しこんでいる。いずれも男、30代半ばといつたところで褐色の肌に皆とすこしだけ違うデザインの運び屋所属”バイロット”の制服を肩で羽織つている。

「坊ちゃん達連れてきたぜ」

二人は元々無口なようでにこりとも笑わず会釈を返す。涼しいホテルを出て日のよく当たる駐車場に停めた一台のバンと新たに増えていた黄色いトラックへと乗り込んだ。

昨日と同じ道をゆっくりと走る一台。バンのほうに昨日の人数に加え1名後ろの座席に加算されたことにより車内はより窮屈になつていた。おかげで窓際のリングディロッドが終始、ぶつぶつと悪態をつ

いている。

「だーかーらー、ボク達一人で帰れるから、他の便のチケットかつてよー」

「何度もいつてるでしょーつ、あちらにこくには身分証明が必要なんです。あなた達は我々の見習いとして同行することになります」

「それじゃあダメなんだつてー・・・」

「大丈夫だ、君たちがあの便に乗つているのはわからないようじてある」

助手席のベイシュがなだめる様に言つ。

「ほんとかよ・・・」

まだ午前9時を回らない時間帯なので空氣はさほど熱されておらず、わりと快適なドライブだつた。

あの日の晚から、渡された食事に手をつけないで布団の中で（ペイズリルに要求して無理やり買ってこさせた）お菓子ばかりをヤケ食いしていたリンクディロッジも流石に空腹に負けたようで市街地の出店で買った玉葱のたっぷり入った辛いタコスを一口田は躊躇したものの誰よりも早く食べつた。

大きなゴールドカイザーは遠ざかつて小さくなる。遠くから見ても街に対する威圧感というか、場違いも甚だしいところは変わらないものだが。

指に付いたタコスの辛いソースを舐めながらリンクディロッジは雲ひとつ無い空を見ていた。

誘拐犯と被害者の相乗りとは思えないほど、それはおだやかなドライブだつた。しかし・・・

いつのまにやら手入れの悪い車が三台ぴたりと距離を離さずにつのドライブに参加していた。

氣味の悪いそれらの車の一台から顔を覗かせた男。頭には汚れたバンダナ、顔は埃にまみれて汚く、手にはライフルを構えている。車から身を乗り出して物騒なものを発砲させる。

タイヤが吹つ飛び、ガタガタと車内は激しく揺れる。弾けたタイヤ

の後輪が地面に擦れて砂を削りながらスピンする。

「なんだつ！？」急いでハンドルを切る運転手。トランクにぶつか
りそうになつたもののどうにか停止した。

舞い上がる砂煙。回る車内で後部座席の端にいたリンティロッドは
隣に座つていた3人に押しつぶされて悲鳴をあげる。三台の車は猫
を挑発する犬のようにぐるりと一台を取り囲んだ。先ほどの狙撃手
がライフルをつきつけたまま運転手に話しかける。

「ちょっとくら兄さん達、金出してつてくんないかなア！？おーっと、
出し惜しみすんじゃねえぞ、早くしねエとそのオツムが弾け飛ぶぜ
！」

威勢のいい強盗は汚らじい口で唾を飛ばしながらやつ言つた。強盗
の仲間の口笛が腹立たしい。

「何、あのブサイク」

潰されて泣きそうになつたリンティロッドが独り言をいつ。

「おいおい、俺達に金田のモンなんて要求するな、あつちいつた」
サングラスの男は窓から乗り出して追い払うような仕草をする。

「つるせえ！後ろにソン連れてんだろうが！早く出さねえか！…！
後部座席に座つていたレイチエが窓から頭を出す。

「悪いけど、正真正銘の太陽の民よ」

男のライフルは前方車輪をはじけ飛ばし、車はさらに傾いた。汚い
口元が笑みを浮かべていやらしい目つきでレイチエを見る。

「ねえちゃん、つくならもう少し賢い嘘つきな

睨みつけるレイチエ。そして、呆れたとこりうつに溜息をついた。
彼女はとても短気だ。

腰のウエストバッグに手を突つ込んで取り出したのは重い銃。安全
装置をはずして狙いを定めて発砲する。わずかな短時間のこなれた
作業。男のふざけた顔は空を仰ぎ、そして車内に倒れこむ。
銃を構えたまま、前を見据える彼女の目には怒りと、ちよつぴりの
茶目っ気が宿つてた。

「私はソンなんかではない」

倒れた男は言い返せなかつた。言い返せなかつた。今できたばかりの額の穴からは新鮮な血が流れる。ぴくりとも動かないその顔に、同じ車の運転席にいた男が遅い悲鳴をあげる。

「何しやがるアマ！！」

仲間の死亡により飛び出してきた男達。しかし、パンパンと乾いた銃声が響くと共に、かつと目を見開くと痛みに顔を歪めて、手に所持した得物を発砲することなくバタバタと倒れていく。その先にはトラックに乗つていた二人の運び屋の姿があつた。

銃口から煙がなびく。

「さすが飛行士さん。判断がすばやいね」

サングラスの男は車から出てうずくまる男たちから銃を奪つていく。まだ息はあるようで、打たれた箇所を押さえてもがいでいる。ぼたぼたと鮮血が乾いた砂に落ちて染み込んでゆく。

「我々も言つてみれば軍の横流れ品ですからね」

飛行士の男はトラックに乗り込み、車を発進させて前に停められた犯人達の車を無理やり押しのける。すると車内から小さく叫び声があがり、愚鈍そうな丸い男が転がり出でてきた。

「まだいたようだな。武器だけ奪つて逃がしてやれ」

ペイシユの一言で飛行士は構えた得物を下ろす。脇からやつてきたサングラスの男が腰が抜けたよたよたと情けなくのた打ち回るそれから拳銃とナイフを引つたくつた。

タイヤを見て愕然とするペイズリルは犯人の車を使おうと提案した。ちょうど一台キレイなままで残つていたものがあつたのでそこに乗り込むことになる。犯人の盗品と思われる荷物やらなんやらを降ろしてもさほどスペースがない。

「ちつちえ車だぜ、こりや5人しか無理そうだな」

「じゃあオレがトラックの荷台に行くつす」

「なんなんだよ・・もう・・・」

車の中でじつと頭をもたげている青年。温室育ちのリンディロッドは人がどんどん撃たれていく状況に軽く吐き気を覚えていた。そ

して同じような身の上の割には隣でケロッとしているリティックが不思議でならなかつた。

「リングディロッド君、大丈夫すか？」

ペイズリルは窓からリングディロッドを覗き込む。

「なんとかね～・・」

車のドアを開けるとペイズリルの額に窓枠が当たつた。こりやまた、痛そうな音が響く。

「　　リングディロッド？」

吹き荒ぶ風の中にはつきりと聞いた名前。腰が抜けてよろめく不恰好な男は轢かれないよう道の脇に逃げる中でその名前を聞いた。車から出てきたのは白い肌がまた一段と青白くなつた美しい金髪を持つた顔立ちのいい青年、額を押さえて痛がる男を無視して新しい車へ向かう。まぎれもなくリングディロッド＝ベゼリルであった。

「じゃあなー、もう強盗なんてやるんじゃねーぞー」

発進した車は道に倒れている何人かを轢きながら荒野の道を進んでいった。

目を見開いたままの額を打たれたバンダナの男を運転席から引きずり出して地面に捨て、汗だくの太い男は運転席にどつかりと座る。

「おい、オマエ・・病院に・・・」

道に打ち棄てられた仲間を無視してドアを閉める。こいつらに構つてる暇はない。男の目には先の利益しか見えていなかつた。行つてしまつた車の反対方向へと進路をとる。

「有力な目撃情報にも金を出す・・・本当はツイてるかもな、オレ」

車の助手席に置いてある今朝の新聞をちらりと見る。お尋ね者欄の見出しひにはこう出でていた。

『アルニーレイズに住むリティック＝ジェイド氏を誘拐した容疑者リンティロッド＝ベゼリル指名手配。有力な目撃証言には5万口ウス、捕まえた者には100万口ウス。（生死問わず）』

「へえ、この辺りでもラジオって聴けるんだ」

車は何事もなかつたかのように空港までの長いドライブを楽しんでいた。

「この辺りは一応国道だ。みえなくつてもな。砂漠の真ん中じや荒れでしようがねえ」

運転席のサングラス男はラジオのつまみを回して局を変える。アルニーレイズで流行りのアップテンポな曲が瞬く間にしてニュースの重苦しい声に変わる。

「あつ、何すんだよ！？」

「坊主、こんなつまんねー歌聴いてたら立派な大人になれねえぜ」

「自分が犯罪者だつてわかつて言つてんの？」

『ここで今入つたニュースをお伝えします』

「ん、何だ何だ」男はラジオの音量を上げる。

『今朝指名手配された、アルニーレイズに住むリディック＝ジェイド君を攫つたとされる誘拐犯、リンディロッド＝ベゼリル一味は先ほどシェダッサ周辺に居ることがわかりました』

「――リンディロッド一味！？」「

車内の視線が一気にリンディロッドに注がれる。

「・・・どーゆーこと？」

『警察はシェダッサ周辺の高速道路、空港などを封鎖。引き続き犯人の行方を追っています。シェダッサ市民のみなさんも、このようないい人物を見かけましたらカラヴァーニア警察に御一報を！有力な目撃証言には5万口ウス、捕獲者にはなんと100万口ウスです！！なお、生死は問いませんよ！一攫千金のチャンスです！！』

どうやら地方放送のニュースだつたらしい。みながそんなことを頭のはしつこで考えながら車はゆっくりと停止する。

ベイシユが日差しのきつい車外へ出てトランクを無線で呼び止める。

「・・・ボイストンさん」

リディックがすつと隣にやつてきて話しかける。

「今更偽名で呼ぶな」

「さつきの人たちが、それともホテルの人が通報したのか、謎は深まるばかり・・」

「オマエ誘拐されるつてことになってるんだぞー!」

「それは本当です」

「・・まあ、ウン・・・そ�だつた」

暑い上着を脱ぎ、車内へほうりこんだ白い肌のレイチェはつむくへ
報道を続けるラジオを切つた。

「空港は使えませんね」

「迂闊に街にも戻れないっすね」

さんさんと照る南国の元気な太陽の下、打つ手立てをなくした一行
はそこに立ち尽くす。ラジオで報道されているということはテレビ
では顔が出ているだろ。新聞にだつて載せられているにちがいな
い。空港は封鎖、街では賞金稼ぎに金に目をくらませた市民が銃器
を抱えてネズミを待つてゐる。砂漠で干からびるまでに果たして人
々の記憶からこの報道が消えるだろ。乾いた砂が足を掠めて風
に乗つて飛んでいく。干からびるのはそれほど時間がかかるなさそ
うだ。

なんと横暴な陥れ方だろ。これが息子にすることだといつのか?
あの男らしいといえばらしいが・・リンディロッドは唇を噛んだ。
タコスの味がする。

空港を使えば遠くないアルミニーレイズ。しかしこの報道ひとつで何
百倍も遠ざかつたような気がした。
ふと、思い出したようにトラックの助手席にいた副操縦士が車から
地図を持ち出して、広げる。

「テレビがほとんど無い村なんてどうでしょ。新聞はあるかもし
れませんが、街に戻るよりかはいいでしょ」

部外者のように冷静な副操縦士の声に皆がもたげていた頭を上げる。

「そんな場所あるの!?」

「はい。ここから3時間ほど行ったところに村がひとつあります。
かなりの過疎地域で、砂嵐の関係でテレビはほとんど映りません

副操縦士が手袋をつけた指でなぞった先には本当に小さく村の名前が記されていた。ベイシユは地図を覗き込んで頭を搔く。

「他にはいけそうな場所もないな・・ひとまずその村でほとばりが冷めるのを待とう」ベイシユはトラックに乗っていた二人を見て続ける「アロドスとゲルハ一は空港に向かってくれ。今日のフライトをキャンセルするわけにもいかん」

それから父は娘を見た。華奢な四肢に白い肌。彼女がこの場所にいることを父は悲しく思つた。

「レイチエ、お前はお客様のお気に入りだ。乗務員が一人で大変だとは思うが、行つてくれるか?」

父の視線をうけて娘は振り向く。娘は父との会話は原住民言葉を使う。物を思うような表情から口元に笑みをこぼす。

「父さん、わたしが彼らを無事に送り届けたい。ヨクスエンさんを助けてくれた彼らを送り届けたい、そう思つてる」

父は「そういうだらうと思つていたが・・・」と苦笑をこぼしながらトラックに乗り込む。

「オレが行くつすよ!」ペイズリルの提案は「お前だけでは心配だから」と即座に却下された。それぞれの行き先へ向かう一台の車。砂埃を巻き上げて村を目指すほうは、窓際にかわつてもらつたりディックが車から顔をだして目的地方面をじつと見ている。

「砂が目にはいってもしらないぞ」

そういうわれても顔を戻さないリディック。なぜかとおもつて顔をよく見てみると、疲れた顔で今にも吐きそうといつ具合である。

「つぐづくわかりにくい顔してるな・・・」

いつのまにかケロリと回復したリンディロッドは前の座席のポケット部分に入つていた雑誌を見て時間をつぶした。

到着した村はひと氣がほとんどなく、ぼつぼつと民家が立つていてる程度で、かなり昔に立てられたのであろう、村の門の文字は「WE COME!」が「WE COM」になつていてる。

レイチヒは村の歴史がつらつらと偉そうに書いてある古びた板を見る。

「昔は金が出たとかで賑わっていたそうね。でも、数十年前に掘りつくしてしまったようで今はゴールドラッシュの亡靈の村」

板に乗つている砂を手で掃う。

「どこか滞在できそうな場所探すか。金は多めに持ってきて正解だつたな」

男はサングラスをはずすとその黒い田で太陽を仰いだ。

「おう、坊主。ぶらつくなら一応変装しておけ。俺のコレ貸してやつか」

彼からリングディロッドに渡されたサングラスは油ですこし曇つていて不快だった。でも怒らせると怖そうなので

「どうも・・・」

曖昧な返事をしておいた。

「リングディロッドさん、リングディロッドさん」

吐き気もひいたのか、爽やかな顔をしたリティックが普段より1.5倍ほど田を輝かせていた。

「おれは村を見たいので、リングディロッドさんは待つてますか?」

テンションの高いこいつは何だか気持ちが悪い、浮き足立つてるので返事を聞くまえに歩き出している。

「ボクをこんな所に置いていく気か?」

一人じゃ心細い、とこりのが本音だった。「何でそんなにはしゃいでるんだ、気持ち悪い」

「この村にはお宝があるかもしれません」ほんのすこしだけ、にやりとしながら彼が言ひ。

「お宝あ?」

リティックはどんどん村の端へ端へと歩いていった。ずり落ちるサングラスをしきりになおしながら追いかけるリングディロッド。たどり着いたのは3つと同じ大きさの倉庫が並ぶ広場。

そのうち2つはシャッターが開いている。

リディックが学校では考えられない機敏さで、倉庫の中にあるものに駆け寄っていく。彼がその機体に恐る恐る手を伸ばすと青く塗装された鉄の冷たさが伝わってくる。

「いきなり走るなバカ！・・・」のフラインは何だ

倉庫の中には青い機体に白と黒のラインの入った複葉機が沢山の整備用の機械に囲まれて大きな翼をめいっぱい広げていた。

「もしかして、このおんぼろフラインがお宝だつていうのか？」

機体のまわりをぐるぐると回り、一箇所一箇所丁寧に見ていく。

「古いタイプです。でもこれは40年前の戦争でカラヴァーニア軍の主戦力であつたフライン部隊のフラインの中でも最高の出来といわれている・・・」

「想定内一うるさい黙れ！」自分の知らないことを語るやつは嫌いだ。

「北の鄙に一機あるらしいとは聞いていたけれど、まさか本当にあらなんて・・・」

惚れ惚れと機体を眺めるリディック。しかし、倉庫の奥のドアから現れた人影に彼は気づかなかつた。

「ボウズ、これの価値がわかるのかい」

はつきりとした声、大空でもよくとおるだろつ。物陰に隠れたリンディロッドがサングラスを上げて相手を窺う。白くなつてしまつた髪にタオルをまいたやたらと元気そうな老人。褐色のこけた頬にはにまりと笑みが浮かんでおり、着ているツナギはとこねびこる汚れている。

リディックはすこし驚いたようだが平然として返事をする。

「乗つたことはありません、だからまだ自分にとつての価値はわからません」

老人はリディックの意を汲んで苦笑する。

「若いのに、こんなボロにのりたいっていうのかい？」

翼のワイヤーを見つめながらリディックは続ける。

「よく整備されていますね」

「あつたりめえよ、30年以上の付き合いでだ。かみさんにも息子にも先立たれた身だ、こいつくれえしか寄り添つてくれるやつがいねえ」

老人は親しみを込めてフラインの胴体を撫でる。

「・・ますます価値のあるものに思えてきました」

「ボウズ、フラインに乗れるか?」

「はい。単葉機なら飛ばした事があります」

聞き耳を立てていたリンディロッドのサングラスがずり落ちる。どういうことだ、あいつ操縦なんてできるのか!?

「今じや複葉機なんて珍しいだろうか。わしも一度単葉機を飛ばしてみたいものだ・。戦争が終わってからといつもの、金山で働いていたからめつきりフラインと離れちまって、ある程度金がたまたころにこいつが軍の横流しにあつてのを見ちまつてよ、有り金はたいて買い戻したよ。おかげで他のやつに浮気できてねえってわけだ」

彼の顔に浮かぶのは戦中の悲惨な思い出か、それとも出撃をなくした今を嘆いているのか。この複葉機に昔の面影を見ているのは間違いないなかつた。

「・・・おじいさん、今から図々しいことを言います」

「なんだ、乗せてくれってのか?」老人は笑みをこぼす

「違います。アルニーレイズまで帰るのに使わせてもらえないでしょ?」

「ボウズ、わしにひとつての唯一の家族、それを今会つたばかりの小僧にやすやすと貸せると思つ?それ相応の見返りがあると思つてよいのだな」

やぶにらみの老人の目がリティックに突き刺さる。しかし、彼は表情を変えない。

「おれの家はたくさん野菜や穀物を作っています。それを月に一度、こちらに届けにきます」

リディックのあまりのあつけらかんとした答えに老人は喉をつまらせた鳥のような顔をした後、大きく唾を飛ばして笑いだした。

「何でこつた！なんとわしの恋人は安くみられたことか！ボウズ、」

「つこつときは少しでも嘘をついたほうがよい」

「嘘は嫌いです。もちろん、あちらにつけたらすぐにつの機を返します。野菜を持って。それから毎月違うフラインに乗つて来ます。帰りは空港の便を使って帰ります」

「・・乗つてきたフラインはどうする？」

「差し上げます。・・おれの家は成金なので、つこつ金の使い方は得意です」

「なんと！わしは成金が大嫌いだ！くだらんことばかりしおる」言葉とは裏腹に二コ二コとしながらリディックに飛行帽を手渡す。彼も、顔をほころばせてしつかりとそれを受け取つた。

「はやく田の前から消えるんだな。この機はやる。・・・じゃから、毎月野菜を持っててくれ、もちろんボウズがつこつに乗つて、だ」年割にがつちりとした手で青年の手を握る。隙間の多い歯で少年のように笑う老人からは、昔の雄姿が垣間見える。青年はその手をしつかりと握り返した。

「お言葉に甘えますよ」

「そうしてくれ。ああ、ボウズ、名をなんといつ？詐欺の場合は訴えねばならんからな」

「リディックです。リディック＝ジェイド」

リンディロッドは出て行つてぶん殴りたい衝動に駆られた。本名を出すなんて何考えてるんだ！？

「リディック・・ほう、おかしな名前だ。都會ではそんな名前が流行つているのか？わしの名前はラダツツだ」しめつた拳は行き場をなくして垂れ下がつた。よかつた、このじいさんラジオも聴いてないみたいだ。

「乗つて帰るなら多めにガソリンが必要だろつ。村の者に頼んで用意させよつ

「そうですね。…でも今お金を持ち合わせていくなくて…」

「コイツの嫁入りのはなむけだ、燃料ぐらいただでやひつ」

「助かります」

ラダツツは倉庫の壁に取り付けてある黒い電話を手にとつて、電話先の人物にガソリンを持つてこいと命令した。

リンディロッドは物陰から恐る恐る出ると、フライインによじ登つて左右の補助翼などをチェックするリディックに落ちていた空き缶を投げつけた。

「何のんきにじいさんと仲良くなつてんだよーこれからどーするつもりだ!?」

「これで帰るんです、おれ達で」

振り向きもせずに念入りにチェックを重ねるリディック。フライインのしつぽに見えるラダーが馬鹿にしたように左右に揺れている。

「本当に操縦できんのかよ」

普段のこいつからは考えられない事。だから信用する気もすこしは芽生えるわけだが・・・リンディロッドはリディックを睨みつける。

「はい、父がよく乗せてくれたんです。畑の事なんかで」

「ふん、農民め。それで、免許は?」

「ありません」

「なッ

「ボウズ、ガソリンがきたぞ」

主翼の具合をチェックするラダツツの後ろに、先ほどはいなかつた10歳くらいの少年がいた。どうやら電話で呼ばれた人物なのだろう、田深にかぶつた帽子で表情が見えないものの、かなりの汗だくで、どうやらちいさな荷台にガソリンを積んで一人で持ってきたようだ。人使いの荒い老人に従つてせつせとフライインにガソリンをいれている。

「ん、誰だそいつは?友達か?」

「違います」

「まあ、なんでもいいわ。すぐに発つのか、中でお茶でも飲んでい

つたらどうだ?」

「冷たい飲み物!」

リンディロッドはやつと一息つけると胸を躍らせた、しかし。

「すいません、成金は忙しいんです」

リディックは丁重に、断つた。

「ほんとうざつてえガキだぜ」

そういうてラダッソは楽しそうに大きく笑つた。リンディロッドはリディックを老人に見えないように蹴飛ばした。

燃料を入れ終わった少年は汚れた手をツナギでゴシゴシと拭いてこちらに走つてくる。

「じいさん、こいつがジゴカネ号もひつて奴か!? なんでえーソンの人間じゃなーかア!」

まだガソリンがついた手で鼻をほじりながら10歳ぐらいの黒い肌の少年は口を尖らす。

「ソンの人間です、よろしく」

リディックは握手を求めて手を伸ばす。よくあんな汚い手を触れるな、とリンディロッドは顔をしかめた。

「あー、たっくさん野菜もつてこいやー」

「はい。・・それじゃあ急ぎます。ありがとうございます」

リディックは倉庫のわきにある革で作られた飛行帽、ジャケットとズボン、手袋、それに長い白のマフラーとゴーグルを持ち出して一式をリンディロッドに手渡した。自分の着るぶんはラダッソに倉庫の奥から出してもらい、手際よく着る。ラダッソのものなので少し大きめだが調整をすればなんとかいけそうだ。

「げー・・・」

リンディロッドは薄汚れたジャケットを持つて顔をしかめた。でもリディックの着ているやつのほうが相当汚いので、観念してジャケットを羽織る。なんか、くわい。

少し湿つていて腕を通すとしつとりとなじんでくる。とても気分が悪い。

嬉しくなつてくるりと回るとやつぱり臭かつた。

如に、か、一、る、の、口、を、サ、リ、其、方、か、

「あー！！オマエ新聞のうとつたゆーかいはん！！」

少年は素顔のリンディロッドを指差していついた。固まる2人。
「ちよつ、河のこと……」

少年は壁の電話に駆け寄るとすぐさま

卷之三

電話の先では

「何！？？」

男が飲んでいた珈琲を噴出して先ほど塗いた新聞に黒レシ//を(へぐる。

そしてシャンケバーツに囲まれた音の悪いラジオからは誘拐犯がこの地方にいるという事が再び報道されていた。

すための鐘を思いつきり鳴らす。

喫茶店や家の窓から人々は乗り出して男を見る。

「あつたりめえよ！おれの体が言つてんだからな！！」
村人は身近にあつた思い思いの武器を取り、表へ出た。

「な、なんてことするんだこの貧乏人！！！」

「そんなに血がみたいなら見せてやるよー己の血をなー！」

！」

「それより、逃げないとまずいです。早くフライングに乗つてください

い」

「・・・ばーか、バーか！オマエの就職先全部一個一個ぶつ潰してやるからな！貧困にあえいで死ねッ！」

リディックがフライングの後部座席の前にあるエンジン始動ボタンを押すと辺りをものすごい爆音が襲い、悪態をつき続けていたリングティロッドはひるんだ。

「前の座席に乗つてしっかりシートベルトを締めてください」リディックはプロペラの横に立ち、それを思いつき手前に引き下げた。するとその反動でプロペラは回転運動を始める。

前に進んでいくフライングを追いかけるように走つて乗り込むとスロットルを奥に少し倒す。プロペラの回転数が上がり、ガタガタと機体をゆらしながら倉庫から出る。

「ほお、よく知つているな」

「じいさん！関心してる場合かよお、でてつちまうぜ！」

倉庫前の広い平野に出ると村のほうから大勢の人々が我先にとつんのめりそりになりながら走つてきているのが見えた。その砂埃のすごいこと、リングティロッド達のフライングのプロペラに勝るほどだった。

「ぎやーっ、来てるぞ、おい！！はやくはやく！！」

前の座席のリングティロッドが後ろを見て叫んだ。しかしリディックは平然としたままフライングのエンジン音にかき消されないよう声を大にしてラダッソにこうじつた。

「来月、またお会いしましょう」

ラダッソは返事のかわりににんまりと笑つて返した。

「ところで、この機の名前は何ですか？」

「こいつの腹に書いてあるとおりだ」

「リディック！早くしろー！」迫り来る村人達の声が大きくなる。

「わかりました」

リディックは前を向き直る。

地面の大きな揺れはエンジンによる振動か、それとも人々が走つてくるからか

リディックはスロットルレバーを思いつきり機首方向へ倒した。ぐいと後部座席に押し付けられる感覚。機体はどんどん加速し、砂を巻き上げながら、迫り来る人々をどんどん離していく。

「上がってくれよ……！」

リディックが操縦桿を手前に引くと機首が上がり、一瞬はふわりと、それから吸い込まれるように空へと舞い上がった。

青空に溶け込むブルーの機体。だれも、空まで彼らを追おうとする者はいなかつた。

「じいさん、じいさん……あのフライイン撃っちゃ……」

「駄目だ」

「でも誘拐犯が……」

「つるさい！犯人だけ当たられるようになつてから物を言わんかこの愚か者が……！」

上昇していく彼らのフライインを口惜しく眺める人々の中にペイズリル達がいた。

「勝手に帰つてしまふんすね……」

空を見つめるペイズリル。隣に立つのはサングラスをなくしたサングラス男。

「これでいいんじゃねえの、俺達も安心して空港にも行けるしよ」「でもせつかく責任持つて送り届けよつとしてるのに、一言もないなんて酷いっすよ」

「結果オーライです。わたしたちもフライインを借りて空港に行きました、今から行けばギリギリライトに間に合います」

「じゃあ俺が借りてきてやつから待つて」

散つていく村人達をすり抜ける兄から視線を上げる。もう遠くへい

つてしまつてほとんど見えないフラインを見つめる。穏やかな風が彼女の髪を優しく梳かす。皮肉な笑みを浮かべてじっと青を見つめた。

「あれがあの機の名前? MONEY MAKES THE MARK GO・・地獄の沙汰も金次第なんて、悪趣味にもほどがあるわ」

「ゾイ砂漠を回り道するところの機では時間がかかりすぎます。危険ではありますが、直進します」

大きな風もなく空はとても穏やかだった。上質の綿をついたような雲が手の届きそうなところに浮かんでいた。

「死なないよな?」

「よほどのことがない限りは」

方位計は西を向いていた。機体は上昇をやめ、水平飛行に移る。「ほんとの、本当に無事に地面に帰れるんだろうなー?」

「帰れないときはおれも道連れですから」

「オマエはジーでもいいんだよ! やっぱオマエだけ死ね!」

「おれが今死ぬとまずいと思いませんけど」

リンティロッドはいつもよりだいぶ近くなつた天を仰いで笑みをこぼした。

「わかつてゐよ、そんなこと」

空と同じブルーの機体はつづくとアルニーレイズへと向かつ。ゴーグルを通した空は、首都のビルの間から覗くものよりも、荒涼とした太陽の民の地から仰いで見たものよりも深い海のようだ。までもどこまでも青かつた。

何時間経つただろう、太陽は真上を過ぎ、傾いてくるような時間。遠くの雲の輪郭を金色に染め、黄昏時の甘美なピンクとムラサキが空を覆つて、東のほうはすでに夜の紺が侵食し始めていた。前方座席のリンティロッドは煌く終わりの斜光を浴び、纖細な瞳を光させて、うるさいエンジン音の中すやすやと眠つていた。

「コンティロッジセーん、リンティーセーん」
後ろから聞こえるのは讐きクラスメイトの声。しかし、今は心地よくも感じる。

「リンジーーーん、リンジーーーん」
いいかげんうさつたくなつてまぶたをゆっくり開く。一面の光。プロペラさえ回つていなければ、きっと天国と錯覚したに違いない。（プロペラが回つてなかつたら本物の天国行きだけど）
地上を見ると、砂地にぽつぽつと南国の木が植わっているのが見える。

「もうつくのが？」

「ゴーグルを上げて田や川をとつながり、よくこんなとひひで寝られたなと自分でも思つリンティロッジだつた。

「はい、あと1時間ほどで」

「あと一時間も？ その時起にせよ、トイレ行きたくなるじやん

「でも、夕日が綺麗だつたので」

凝つた首をほぐしていたリンティロッジは田線を上げて夕日を見る。

「・・ボクほどではないけどね

素直になれない自分が、ここで墜落して死んでしまえばいいのと

思った。

こんな自分にそつ思わせるエビの夕日は綺麗だった。

「どうしますか、このまま行くとおれの家に着陸しますが、他にリクエストはありますか？」

「うん、別に・・・ちょっと待つて」

「はい」

寝起きと空腹も手伝つて回転が鈍足な頭で必死に考える。

「クラスメイトのチャーチルチヒット＝アーニスの家がこの近くにあると思うんだ、知つてるか？」

「はい。何度か父がパーティーに呼ばれていたので」

「そこに向かえ、いいな！」

「はいはい」

追いつけない夕暮れの太陽を追いかけるように、今では空とは一体になれない青のフラインはさらに西へと向かつ。

「この家ですね」

大きなとうもろこし畑の上空を飛ぶフライン。そこからこれまた大きな屋敷をみつける一人。

「そう。もう学校も終わってるだらうし、ジャストターライム「ジャストターライム」では着陸するので緊張してください」

「何で」

「事故るかもしませんから」

夕日はもうじき沈みきるだらう。紺色の暗い空が空を覆いつくそうとする時間だつた。半分ほど建物の影になつて見えにくい庭を見極めながら、左へ右へ旋回して慎重に高度を下げていく。

地面に接地する寸前、リティックはぐいと操縦桿を引く。庭の美しく手入れされた青い芝に後部車輪が触れる。地面をえぐりながらフラインは前進し、ブレーキをきつくかけるとやがて停まった。

「つてえー！また頭打つた！これだからフラインは・・・」

シートベルトをはずしてよろめきながら座席の上に立つと、何事かと駆けつけたこの家の召使達と目があつた。驚きと不信感の入り混じつた目。憎しみをこめた目の方が多分にこの芝生をメンテナンスしている人間だろう。

召使を押しのけて小さい人が割り込んできた。

「リンディロッド様！」

やたらと美しい服を着た少女はフラインへと駆け寄る。彼はなるべくかつこよく、クールに飛行帽を脱いだ。

「やあ、チヨルチエット嬢」

しかし、リティックの見るかぎり夕日に染まる彼の美しい金髪は飛行帽をかぶつっていた事によりペちゃんこになつていた。

「どうしてしまつたのです、その・・・ユースにたくさん・・・わ

たし心配で心配で！」

彼女は目を潤ませて、フラインからよろよろと降りてきたリンディロッドに抱きついた。彼も、ぐらぐらしながらそのか細い背中をそつと包む。

「ゴメンよ、チャルチャット。でもボクは無実だ、証拠にリディックがあそこにいる」

指差された当人は何を言つわけでもなく、軽く会釈をした。

少女のほうはブサイクでもなく、しかし可愛くも無い女だった。

「リディックさん・・あんな顔だったんだ・・」

リンディロッドは表情を一瞬翳らせ、そして意をけしたかのようにじっと彼女を見つめた。

「実は・・ボクとリディックは国の特殊任務についていたんだ。しかし、国の恐ろしい秘密を知つてしまつた・・だから今カラヴァニア政府に追われている」

先ほど考えたデータラメを真剣に伝える。

「え、ええ・・そうなの？」しかし彼女はそんなことにはあまり興味がないらしい。

「だから一時ボクだけでも南へ逃げる事にした。しかし、国は簡単に逃がしてはくれないだろう・・そこで、よければ君のパスポートと服を貸してもらえないだろうか？カツラもあればいい。とにかく国から出なくてはならないからね・・」

「でもパスポートは・・」少女が難色を示すのもお構いなしにリンディロッドは続ける。

「いつか、この国に再び降り立つことができたなら、ボクは真っ直ぐ君のもとへ行くよチャルチャット。その時は、君がまだボクのことを信じてくれていたなら・・結婚しよう

「リンディロッド様・・・」

少女の頬は夕日も手伝つてばら色に染まり、もう一度彼の胸へと飛び込む。

ああ、大した大根役者だ、とリディックは沈み行く夕日に向けて大

きなあくびをした。

「わかりました、リンディロッド様。わあ、中にお入りになつてください。召使たちには何もしないよう言つておきますから。じい！わたしのヘアースタイルそつくりのかつらを用意しなさい、いますぐに！」

「はい、わかりましたお嬢様」

「いい、通報なんてしたらクビよ。全員クビーー！」

「わかりましたお嬢様」

少女は上機嫌で、疲れた顔のリンディロッドの手をひきいて屋敷の中へと入つていってしまった。

やれやれ、見ていられない、トリディックは帰りたくなつたが、召使達が入れと言つのでお言葉に甘えて美味しい紅茶をいただくことにした。

美しく飾られた室内はとても涼しく快適だが、何時間にもわる空の旅のあとだと、どうにも無機質に思えて仕方が無い。リディックは冷たい水を飲みながら、明日から学校かな、とぼんやり考えていた。

隣の部屋が騒がしくなつたかと思うと、勢いよくドアが開いてチヘルチコット嬢に扮したリンディロッドが顔を輝かせて飛び出してきた。皮肉なことに本人よりも美しい。

「みるよりディック！ とうとう女装までしたぜ！ 今ならミスなんとかもひるんで外を歩けないだらうやーーー！」

キメキメポーズで自慢してくるリンディロッド。しかし、彼はこういう人間で、それでも誰にも迷惑をかけていないことをリディックはもう知っていた、臆病なこの友人を。

そして彼と自分との間の扉を閉める鍵になる言葉を、封じていたかつたけれど必要だから彼は取り出した。

「もうじきおわかれですね」

リンディロッドは鍵を隠そうとしていた。そのまま空港まで付いて

きて、新しい何かに巻き込まれてつっこむればいい。ここにも、ボクと同じひねくれ者なんだから。

表情を殺して彼を見る。

「また明日学校で、つてわけにはいかないだろ？ せいでいるよ。」

「それはよかつたです」

相変わらず表情の読めないやつだ。でもすこしだけわかるようになつた。クーラーがきつくてちょっと寒いって思つてるんだろ。

「リングディロッド様、用意すべて整いましたー」

下からチエルチョットの声がする。ワンテンポ遅れて返事をするリングディロッド。

「じゃあね、こいつにスキーなんてしてしへるんじゃないぞ、さぐるみで」

きびすを返してリングディロッドは言つ。

「必ず行くと思います。フライング」

親しみを込めてリティックは言つ。

玄関に降りていいくと田の前に大きな車が止まっていた。慣れないスカートでぎこちなく乗り込むと、詰め寄つてくるチエルチョットをうつとおしく思いながら目を閉じた。

車はフライングと比べると本当に小さな揺れしかなく、しつかりとしたシートのおかげでおしりも痛くない。

けれど、心地が悪い、そう思つた。

光がともる夜の街。電気がカラヴァーニアにもたらした恩恵は大きい。

「あいつのこと、砂漠に捨てよつと思つてたのに。学校を去るのは僕のほうだった。皮肉なもんだな・・・」

自分の胸で眠る大きな荷物を押しのけて、リングディロッドは暗くなつた星の見えない空を眺めていた。

「あつ！」

今夜はかくまつても「うり」とになつたりティックが屋敷を徘徊していると、金物に袖をひつかけてやぶいてしまつた召使と遭遇した。

「やだ、またやつちやつたへ、直さなくひや。」

「おれが直しますよ」

自分の裁縫セットをポケットから出すと彼はそう申し出た。

「えつ、いいんですか？」

遠慮がちに微笑むメイド。彼は「うり」と言つた。

「裁縫、得意ですから」

(後書き)

いかがでしたでしょうか。
宜しければ一言でも感想などいただければ凄く嬉しいですー・励みになります!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0535d/>

エキセントリックブルース

2011年1月19日04時51分発行